石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第441号　令和2年7月1日発行

企画展 没後35年 鴨居玲展 －静止した刻－

鴨居玲《静止した刻》 東京国立近代美術館蔵
－「没後35年 鴨居玲展 －静止した刻－」より－

前田家の甲冑・陣羽織【前田育徳会尊經閣文庫分館】

加賀ゆかりの個性派絵師 守景・岸駒【古美術】

優品選 －文展・日展を振り返る－【近現代工芸】

木と向き合う【近現代彫刻・版画】

新収蔵品選【近現代絵画・彫刻・写真】

優品選【近現代絵画・彫刻】

- 令和2年度展覧会会期の変更について
- 石川県立美術館オンラインコンテンツのご紹介
- 休館中の当館で
- 土曜講座について
- アラカルト ただいま展示中

第3·4·7·8·9展示室　企画展

没後35年　鴨居玲展

ー静止した刻ー

主催：石川県立美術館　共催：北國新聞社　企画協力：公益財団法人日動美術財団

7月31日（金）～8月30日（日）　会期中無休

◆観覧料

	一　般	団体／友の会
大　人	1,000円	800円
大学生	800円	600円
高校生以下	無料	

※団体は20名以上。 65歳以上は団体料金。

当館では五年ぶり六回目の、お馴染みの企画展です。今回は新型コロナウイルス感染症の影響で、利用者の皆様にもさまざまなご迷惑をおかけしております。通常は企画展示室のみでの開催ですが、コレクション展示室を含めた五室に拡大されたことも、その影響のひとつです。ソーシャルディスタンスを確保するため、作品間の距離を大きくとりました。怪我の功名ではありませんが、そのことで一点ずつに余裕を持って向き合えるようになったと考えています。通常の展示では得られなかった気づきや、鴨居玲という画家への理解など、鑑賞者の皆さまに新たな出会いがあればと期待しております。

また今回の鴨居玲展では既出作品に加え、初出の作品や資料が展示されることも魅力のひとつです。例えば一九七七年《村の楽隊》。制作年からスペインでの経験をいかした、パリ滞在中の作品と推測されます。ほろ酔い加減の男が青空の下、タクトを揮っています。十号ほどの小さな作品ですが、中年男の哀愁とユーモアが綯い交ぜとなった逸品です。また、鴨居玲が所蔵した石膏の首像を三点展示します。道化師のメイクやアクセサリーが施され、一目すると悪趣味な印象をうけます。それが、しばらく見ていると何を思ってこのようなメイクを施し、手元においていたのかと感慨が深くなるのです。

このほか、県内の複数の所蔵者からも多数の出品を頂きました。この展覧会は、熱心な鴨居ファンの皆さまのおかげで開催できるものと、改めて感謝申し上げる次第です。

《村の楽隊》1977年
個人蔵

学芸員の眼

没後三十五年を経て、鴨居玲の人気はなぜ衰えないのでしょうか。理由はいくつも考えられますが、鴨居が「自画像の画家」だったということがあるのではないでしょうか。それは、自画像を多く描いたというだけでなく、自らの内面を作品に投影しつづけた画家であったということです。自身のうちの闇に目を向け、醜さをも晒す。鴨居のあり方に、今なお共感する人が絶えないのです。

さて、自らの内面を作品に投影した作家といえば脇田和がいます。当館の重要な所蔵作家の一人ですが、脇田も自身の内面や日常を、日記を綴るがごとく描きました。こちらは、穏やかな色彩で小鳥を交えて詩情豊かに描き、「幸福の画家」と呼びたくなります。対する鴨居は「苦悩の画家」でしょうか。両者とも自分の芸術に厳しく、そして真摯に向き合った画家ですがとても対照的です。

《肖像》1985年
個人蔵

《自画像（絶筆）》1985年
笠間日動美術館蔵

前田育徳会尊経閣文庫分館

前田家の甲冑・陣羽織

6月20日(土)～7月26日(日)　会期中無休

前田育徳会展示室では、引き続き「前田家の甲冑・陣羽織」を紹介します。作品の展示間隔を空けるため、いつもより少ない点数ですが、甲冑二点、陣羽織八点ほか計十四点を展示中です。今回のだよりでは、二点の甲冑のうちの一点、六代吉徳所用の甲冑の製作経緯について、詳しくご紹介しましょう。

製作の指導にあたった御細工奉行の有澤森右衛門が記した『御用内留帳』（金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫）には、細部に至るまで藩主吉徳の「好み」をうかがいながら製作されたことが記されています。

吉徳は春田派の面頬（めんぼお）や明珍派の兜に目を通す中、明珍信家の兜が気に入りましたが、有澤は「全体の形が悪く寸法も小さい」と、ふさわしくないことを進言します。結局、既に買い上げた春田動助の兜を再利用することになり、前立（まえだて）は、吉徳好みの「半月に金の梅鉢紋」に決まりました。

最も参考にしたのは、先代綱紀の甲冑です。これを着用し「これより少し大きめでいいのではないか」と言った吉徳に対し、有澤は古法に従って正しく寸法を計ることを勧めます。体に合ったものでなければ、長時間の着用や運動の妨げになるからです。その他、胴の小皺皮（こしぼかわ）は黒塗り、籠手（こて）の鎖は惣鎖・格子鎖とすることなどが決まりました。

こうした記録から、新たに製作したものと倹約すべく再利用したものの両方があったことがわかります。この時代「倹約して治世を大切にすることこそ、心がけるべきこと」だったのです。

《黒塗筋（くろぬりすじじゅう）十二間（に）甲冑（けんかっちゅう）》六代吉徳所用

第2展示室【古美術】
加賀ゆかりの個性派絵師

守景・岸駒

6月20日(土)～7月26日(日)　会期中無休

加賀ゆかりの絵師、久隅守景と岸駒の特集展示です。だよりでは、守景の代表作でもある《四季耕作図屏風》について述べてみます。

《四季耕作図》とは、文字どおり春の田起こし・田植えから秋の収穫に至る季節の移ろいを描いたもので、田園風景が広がる中に営まれる人々の生活がうかがえます。元来、中国において権力者が「人々の生活」を学ぶべく「鑑戒画（かんかいが）」として描かれたことがはじまりで、「機織（はたお）り」と対の画題でした。やがて画題は日本にも入りましたが、わが国では「鑑戒画」ではなく、「農耕風俗図」として発展します。

守景の《四季耕作図》に、描かれる人物が「中国風」のものと、「日本風」のものがあるのは、このように画題が中国に拠るものだからですが、守景はさらに日本独自の「農耕図」として進化させました。本館は、「中国風（旧山川家）」も「日本風（重文）」も所蔵していることから、双方を比較して鑑賞することができます。人物の姿以外に、ちがいはどこにあるでしょうか。

例えば、働く動物です。中国風の《四季耕作図》ではロバが、日本風の《四季耕作図》では牛が働いています。他にも、片方にしか描かれていない光景をいくつ見つけられるか、是非屏風を前に探してみてください。

重要文化財《四季耕作図屏風》久隅守景　（部分）

第5展示室【近現代工芸】

優品選

－文展・日展を振り返る－

6月20日（土）～7月26日（日）　会期中無休

本年は新型コロナウイルスの影響により、残念ながら改組新第六回日展金沢展は開催中止となりました。そのため、工芸分野では日展の気分を少しでも味わっていただけるよう、過去の日展出品作や、日展や文展で活躍した作家を中心に紹介しています。

日展は、明治四十年（一九〇七）に文展としてはじまり、大正八年（一九一九）に帝展、昭和十二年（一九三七）に新文展、昭和二十一年（一九四六）に日展と名称を変更しながら現在まで続く公募展の一つです。工芸分野は昭和二年（一九二七）の第八回帝展から始まります。

日展の工芸は分野や素材・技法が多岐にわたるため、一括りに作品について述べることは難しいのですが、各分野に共通する特徴は、確かな造形力とそれを支えるための技術力、またモチーフの発想が革新的であることがあげられるでしょう。

今回陶芸分野では、武腰敏昭《色絵白金彩飾鉢　長閑》を紹介しています。鉢の両端を白金彩で彩り、見込みには青を基調とした釉薬で鳥が描かれています。呉須で陰影をつけたのち、水墨画で使われるたらしこみ技法を用いて施釉しているので、平面でありながらも立体的な表現となっています。釉薬は人と環境に優しい無鉛釉薬を使用しています。表現もさることながら、作家の精神も非常に現代的といえるでしょう。

その他、カエルやひまわり、あさがおなどの季節の動植物が描かれた作品もお楽しみください。

武腰敏昭《色絵白金彩飾鉢　長閑》

第4展示室【近現代彫刻・版画】

木と向き合う

6月20日（土）～7月26日（日）　会期中無休

前号では木彫の歴史的な流れについてお話しましたが、今回は展示中の現代作品二点について具体的に紹介します。

高橋清は、古代メキシコ文化に魅せられメキシコに渡り、十一年間彫刻を教えたという経歴をもちます。同国滞在時、古代メキシコで栄えたオルメカ文明の遺跡と神話に題材を得て制作された《人とトラロック》は、日本伝統の彫刻素材というイメージを超えて、木が世界中で人々とともにあることを再認識させてくれます。トラロックとは雨の神のことです。作品中央の球体を二つに分け、それぞれ人と神を象徴的なかたちであらわしています。

梶本良衛も「木と向き合う」というテーマにふさわしい作家です。木を焼いて色彩と表情をつけるなど、木の様々な表情を作品に活かしています。《今のワ・タ・シ》は、杉材を寄せ木して腕や脚をつなげています。まだらに塗られた黒・赤の漆や粗く残されたノミ跡によって、変化に富む表面をつくりだしています。

最後に、梶本の木への思いを引用します。「気候の変化が、木のおもしろいひねりや美しいうねりを生み出している。それは、一本たりとも同じではなく、その木の成長の記録であり、歴史であり、風雨に耐えた力強さでもある。これこそ、私が自分の作品を制作するに当たって、木の持つ本来の美しさをこわすことなく、作品に生かしたいと思うゆえんである。木から発して、木に帰る。木は私の創作の原点である。」（「梶本良衛展」金沢市民芸術村〔二〇〇〇年〕フライヤーより）

高橋清《人とトラロック》

第6展示室【近現代絵画・彫刻・写真】

新収蔵品選

6月20日(土)～7月26日(日)　会期中無休

令和元年度、近現代の絵画・彫刻部門では三十六点の新収蔵品がありました。内訳は日本画十点、油彩四点、彫刻一点、写真二十一点となります。

日本画の十点はすべて寄託されていた作品をご寄附いただいたものです。石川の近代日本画を俯瞰したとき、まるでパズルのピースをはめ込むように歴史と系譜の空白を埋めてくれる作品群といえます。当時の日本画家たちの息づかいや、それを支えた所蔵家のこころが感じられます。

油彩画では、昨年度の特別陳列「鈴木治男―共生の森―」に出品された代表作の中から、三点をご寄附いただきました。鈴木治男氏は昭和四十九年に金沢美大を卒業し、長らく金城大学短期大学部で教鞭を執ってこられ、水や大地、自然をテーマに旺盛に制作を続けています。他には六反田英一氏の《夢見る刻》(第七十二回二紀展田村賞受賞作)が収蔵されました。

彫刻は一点、吉田三郎の《偵察》をご寄附いただいております。昭和十六年、第二次世界大戦を背景に士気高揚の要請に応えた作品です。騎乗する日本兵をモチーフに、文字通り人馬一体ともいえる絶妙なバランスと造形感覚で作られた小品です。

最後は写真二十一点の紹介です。写真の収蔵は、平成三十年度の吉川恍陽に続いて二人目になります。作者の冨岡省三は国展写真部で活躍した石川の代表的な写真家です。生前の撮影について調査を進めてきましたが、国展出品作を中心に代表作を絞り込み、昨年度のご寄附にいたりました。

吉田三郎《偵察》

第3展示室【近現代絵画・彫刻】

優品選

6月20日(土)～7月26日(日)　会期中無休

洋画部門では、中川一政の《向日葵》や小絲源太郎の《猫の居る静物》など静物画の名品をご覧いただきます。小絲は東京美術学校西洋画科を卒業し、主に文展と帝展を舞台に活躍。金沢美術工芸短期大学と東京藝術大学で教授を務め、昭和四十年に文化勲章を受章しました。《猫の居る静物》からは、日本の風土に根差した風景や静物を描くことを生涯のテーマとし、印象的で重厚な表現様式美に到達した、小絲の実直で真摯な作画姿勢が伺えます。

彫刻部門からは、坂坦道、得能節朗、石田康夫らの作品を展示します。三名とも具象人物像を得意とした作家で、人間の感情や内面的な美の表現を追究してきました。派手なポーズや劇的な舞台装置がなくても、作品の周囲には豊かな空間が広がります。

日本画部門からは、先月から引き続いて展示する《棲む》を紹介します。本作は作者が住んでいた京都にある深泥池に取材したものです。深泥池は「みどろがいけ」とも「みぞろがいけ」とも読み、京都最古の自然が残る湿地帯にあります。作者である石川義は、本作のように自らの足下はもちろん、各地の自然を取材することで日本の原風景を描いた画家でした。その他にも西出茂弘の《木漏れ日》など、これからの季節に相応しい作品をチョイスしましたのでぜひお楽しみください。

石田康夫《昇華》

令和２年度展覧会会期の変更について

令和二年度は、東京オリンピック・パラリンピックや国際北陸工芸サミットが予定されていたことから、年間を通して美術館の企画展を計画してきました。また、コレクション展示室での特別陳列も古美術や工芸、絵画・彫刻などさまざまな分野での開催を予定していました。

ところが、年明け早々から世界的に新型コロナウイルス感染症が流行し、三月以降は全国の美術館・博物館が開けない事態が発生して、展覧会も延期もしくは中止となりました。

当館も感染症対策として、四月十四日から全国の美術館と同様に臨時の休館となり、一時は全国に発せられていた緊急事態宣言が解除され始めたのをうけて、五月十八日からコレクション展示室を再開することができました。

開館にあたっては、来館時の体温チェック、利用者全員の手指消毒、密集・密接を避けるため、館内を一方通行とし、来館者同士の距離を保つなど多くの条件が課せられました。それらの諸条件をクリアして、展覧会開催の運びとなっています。

今後予定している展覧会について、作品の集荷が滞ったり、入場者の安全確保が現状で十分でなかったりしたために、現在までに中止が決まったものや延期の決まったものがあります。現在までの状況をまとめてお伝えします。

今後の新たな会期や、日程につきましては、決定次第当館公式ウェブサイトでお知らせします。

ご迷惑をおかけしますが、ご理解のほど、よろしくお願い申し上げます。

〈会期が変更になった展覧会〉

【企　画　展】「没後35年 鴨居玲展 ―静止した刻―」

【特 別 陳 列】「日本往生極楽記と一遍上人絵伝」（前田育徳会尊経閣文庫分館）

※新会期はいずれも、令和二年七月三十一日（金）～八月三十日（日）となります。

〈当面の間、開催延期となった展覧会〉

【特 別 陳 列】「きらめく美　北陸ゆかりの截金作家たち」（近現代工芸）

〈本年の開催を中止した展覧会〉

【企　画　展】「加賀百万石 文武の誉れ ―歴史と継承―」

【特 別 陳 列】「前田利為の文化業績」（前田育徳会尊経閣文庫分館）

【特 別 陳 列】「よみがえった文化財」（古美術）

【コレクション展】「優品選」（近現代絵画・彫刻）

石川県立美術館オンラインコンテンツのご紹介

当館は四月から五月にかけて新型コロナウイルス感染症の影響で臨時休館していましたが、その間もみなさんが美術に親しんでいただけるよう、インターネット上でいつでも楽しめる企画の配信を始めました。

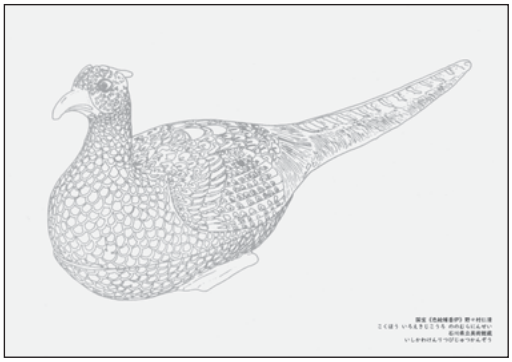
・コレクション紹介「#石川県美のコレ見て」

当館が所蔵する作品をピックアップし、短いコメントやみどころとともに紹介しています。毎週金曜に更新しています。画像と解説を見ることができるページへのリンクをクリックしていただくと、さらに詳しい情報もご覧いただけます。作品によっては、裏側や内部の写真が掲載されているものもありますので、あわせてアクセスしてみてください。

・「ぬりえであそぶ石川県美」

当館所蔵作品から三種類のぬりえを公開しております。本気で塗ると二日かかる（!?）塗りごたえ抜群なぬりえになっていますので、大人も子どももご一緒に、ゆっくりと楽しんでいただきたいコンテンツです。

これらの内容は、いまもツイッターとフェイスブックで公開・更新中です。それぞれの公式アカウント「石川県立美術館」にアクセスし、ハッシュタグ「#おうちで楽しむ石川県美」で検索していただくと、今までのコンテンツをまとめてご覧になれます。今後も、美術を楽しんでいただける内容を企画していく予定です。ご注目ください。



《色絵雉香炉》ぬりえ

休館中の当館で

休館中も、館内では様々な作業が行われていました。今回はそのひとつとして、二階コレクション展示室にて常設展示している、国宝《色絵雉香炉》（野々村仁清作）のケース清掃について紹介します。

まずは、細心の注意を払って作品をケースから避難させます。複数の職員で作業し、作品のほうに落ちてくるものなどがない安全な場所に移動させます。ちなみに、このケースには国宝《色絵雉香炉》とともに重文《色絵雌雉香炉》も展示されています。同じ展示室内での移動ですが、国指定文化財二件の取り扱いは、絶対に気を抜けません。また、このとき作品そのものについても、状態確認や写真撮影を行います。

いよいよケースの清掃です。ガラスを拭き上げるのですが、外側だけでなく中からも拭き取ります。ガラスは日常的に清掃してはいますが、じっくり時間をかけることができるこの機会に、改めて念入りに点検します。また、作品を照らすライトも交換。照明器具に寿命がくると、チラチラと点滅する、暗くなってしまうなどの可能性があるので重要な作業です。

作品を再度ケースにおさめて完了です。これで、作品がガラスの向こうからでもよく見え、適切な照明が当たるようになりました。作品とその周辺のチェックを欠かさず行うことで、ご来館のみなさまによい状態で作品を楽しんでいただくことを、私たちは目指しています。

◆土曜講座について

六月、七月に予定されていた土曜講座は、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため中止となりました。

講座を楽しみにしてくださっていた皆様にはご迷惑をおかけいたしますが、何卒ご理解賜りますようお願い申し上げます。

土曜講座の今後の予定については、改めてお知らせする予定です。

アラカルト ただいま展示中

à la carte No.47

《ギター》ぎたー

縦80.7cm　横65.0cm
大正13年（1924）

飛鳥哲雄　あすか・てつお

明治28年（1895）～平成9年（1997）

飛鳥哲雄（本名：高橋鉄雄）は金沢市に生まれ、石川県立工業学校図案絵画科を卒業後、東京美術学校図案科に進学しました。美術学校では、工業学校の一期生で教授を務めていた島田佳矣に図案を、同じく教授であった岡田三郎助に洋画を学び、二科会を中心に作品を出品します。美術学校卒業後は三越に入社し、主に宣伝広告を担当しましたが、大正十四年に母校である工業学校で校長を務めていた青木外吉の勧めにより図案絵画科に着任。美学や工芸史、デッサンなどを担当するとともに、石川県工芸意匠指導員として加賀友禅など石川の地場産業である工芸のデザイン力向上に尽力しました。

当時の工業学校には図案例会という制度があり、生徒たちは各科共通のテーマをもとに、デザインの創造性を競い合いました。飛鳥が工業学校在籍時の一年後輩には、漆工科に松田権六がおり、松田は英才揃いの工業学校の中でも常に優秀な成績を収めていた飛鳥に憧れ、日々漆工作品のデザイン研究に没頭したそうです。

工業学校在職中に金沢洋画協会を設立し、大正期新興美術運動の一環として結成された造形美術家協会同人としても活動。金城画壇洋画部の中心人物として、石川県の洋画振興と普及に努めました。

《ギター》は、飛鳥が工業学校に着任する直前に描いた作品です。デザイン振興とともに、純粋美術の将来的な発展と隆盛が、地域文化の醸成には必要不可欠との認識をもっていた飛鳥の、芸術全般に対する深い造詣と洋画表現への憧憬がみてとれる秀作です。

次回の展覧会

令和2年7月31日（金）
～8月30日（日）
会期中無休

前田育徳会 尊経閣文庫分館	第2展示室
日本往生極楽記と一遍上人絵伝	加賀ゆかりの個性派絵師 守景・岸駒

第5展示室	第6展示室	第3・4・7・8・9展示室
キラキラ×工芸【近現代工芸】	夏休み 親子で楽しむ美術館 もっと、いしかわ【近現代絵画・彫刻・工芸】	没後35年 鴨居玲展 －静止した刻－

ご利用案内

コレクション展観覧料
一　般　370円（290円）
大学生　290円（230円）
高校生以下　無料
※（　）内は団体料金
7月6日は第1月曜により
コレクション展示室無料の日

7月の開館時間
午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間
午前10:00～午後6:00 年中無休

7月の休館日は
27日（月）～30日（木）

広告
「石川県立美術館だより」に広告を掲載しませんか？
石川県立美術館友の会会員、石川県立美術館協力者、県内各行政機関及び文化施設、全国の美術館・博物館へ
郵送配布!! 3,000部発行
ターゲットを狙った 知名度向上
県立美術館発行の 信頼度の高い広報媒体
お問い合わせは ☎092-716-1401
株式会社ポープ 福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG薬院ビル7F
東京証券取引所マザーズ上場 福岡証券取引所Q－Board上場 財源確保 検索

石川県立美術館だより
第441号（毎月発行）
2020年7月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。